



Title	コリングウッドの歴史叙述(その3) -歴史的過程に内在する原理について-
Author(s)	河瀬, 明雄
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1975, 16, p.23-34
Issue Date	1975
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/9645">http://hdl.handle.net/10069/9645</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-28T17:47:00Z

## コリングウッドの歴史叙述（その3）

——歴史的過程に内在する原理について——

河 瀬 明 雄

### Collingwood on Historical Narration and Its Own Inner Logic, PART III

AKIO KAWASE

以上引用したいくつかの例をもとにして、コリングウッドが考えた歴史叙述の論理とは一体如何なるものであったかについて、これから推論してゆくことにする。

ところでコリングウッドの諸記述は、少々荒っぽい言い方が許されるならば、ある精神・思想・観念が全く性格を異にする別の新しい精神・思想・観念の衝撃を受けてどのように変質していったか、またこれらの精神・思想・観念間にどのような関係がみられるか、これを歴史過程の中で把握するのが彼の中心テーマであったことがよく分る。ただし、コリングウッドの叙述の方法は、常にこうした歴史の変遷の諸事実を時間的経過に沿って記述してゆくわけではない。例えばケルト文化の再生を取扱った際には、まず変遷の結果としてのケルトの再生に注目し、そこから過去へと遡って再生という現象を説明しようとし、またSMのプロローグでは現代ヨーロッパ文化の危機的状況を打開するために、まずもって現代の病的状態を診断し、中世キリスト教思想に現在の人間が失ったエネルギーを発見し、さらに古典古代の異教思想にまで遡ってそこから再び時間的流れに沿って中世、ルネサンスへと人間精神の推移の模様を明らかにしてゆく。

これらの記述方法は、彼がIHの歴史的思考の展開で示したギリシア・ローマから中世、ルネサンスへと論を進めてゆく場合のものとは明らかに違っている。なぜコリングウッドがある時代・ある精神・ある出来事をまず示して、それがどうして現われたか、なぜ生起するに至ったかを問う方法、換言すると結果からその由来を推定するという方法を歴史叙述そのものとして用いているのか。実はこの問題を解くことが彼が抱いた歴史を貫く発展の論理を明らかにする上での重要な鍵となると筆者は考えている。

たしかに古代ギリシア・ローマの古典文化・精神に対するキリスト教文化・精神の挑戦は、

ローマ軍によるブリテン島占領（ローマ人のケルト支配）という事態によって生じたケルトのローマ化をみても明らかのように、ただ単に精神的な衝撃としてではなく、もっと全体的な、民族対民族の生まぐさい衝突ともいべきものの諸々の結果を生んだが、ケルト精神がローマ精神をイギリスへ誘導・吸入する原因となったわけではないし、いわんや前者が直接後者を生み出したのでもない。両者は全くある時期に偶然相接したに過ぎない。従ってコリングウッドはこの偶然性を認めた上で、両者の関係をふまえてケルト再生の問題を考えたことも前記の文章を読めば明らかである。これと同様のことが歴史思考の展開の中の、ギリシア・ローマ的思考とその後に出現したキリスト教的思考との関係にも言えるわけである。だからルネサンス歴史思考の出現・展開は、その前のキリスト教的歴史思考とは基本的に違っていたとコリングウッドは考えていたと判断してよいだろうし、いやむしろそう判断すべきであろう。換言すれば、第一代交配種たるローマ・ブリテン文化と同じ立場にあたるものがルネサンス文化というわけである。

ところでコリングウッドが偶然的接触にすぎぬとした二つの思想や精神の内容に立入ってみると、たとえばケルトの精神の一つの有力な表出である芸術様式を彼は“背景や色彩についてはそれをあまり重要視せず、専ら直線や曲線による抽象の様式を好むいわば二次元的芸術”と規定し、この特色ある様式をもった芸術がローマ人支配後、墮落した古典芸術の様式にとって替られたと述べる時、彼は両者間に相対立する関係の存在を認めている。これをもコリングウッドは偶然と考えたのであろうか。またヨーロッパ歴史思想の変遷を述べる時、古典古代の歴史叙述が所謂過去の人間の行為を取扱った人本主義であって、それが歴史の変遷過程の基盤にある永遠的存在としての実体概念にもとづいているのに対し、中世の歴史思想は“行為における人間の盲目性とそれを支える神の恩寵、換言すると歴史上の出来事は行為者である人間の英知にではなく、出来事の推移を予め定めた神の意志の働き”として捉え、ここにも相反し、対立する概念が時間的前後関係の中にみられることを明らかにしている。これも全くの偶然と彼は考えるのだろうか。あるいは逆にコリングウッドはこうした思想や精神の変遷そのものの中に、対立乃至は否定力が存在することによって、はじめの思想・精神とは全く別の、新しい思想なり精神なりが生じること、従って、これらの間の関係については説明や解釈を加えることなく、ただ叙述してゆくべきだとしたのであろうか。また一方、コリングウッドはSMでみたように、現代社会の危機をその精神構造に求め、これを分析して危機救済のための糸口を時間的に遡って中世に見出した。そして両者を対比し、更に古典古代から中世、中世からルネサンス、現代へと時間的展開の流れに従って、それらの論理的関係を明らかにした。すなわち古典古代の異教思想の精神構造を分離主義原理を根幹とするものとして捉え、この原理は発展するに従って切り離した一つ一つのものを代るがわる求めてゆくが、それでは何時までいっても満足が得られず、必然的に、すべてのものの調和を求めると、それとも、その中の一つを把って他のすべてのものを抑えるか二つに一つの方向に進んでゆくことによって生の統一をはからねばならなくなる。これこそ中世的生であり、ルネサンス的生である。

これは前述した偶然的取扱いは異った別の観から、すなわち思想の展開そのものの中に、換言すると思想が成熟してゆけばおのずから新しい局面が、しかもはじめの様相とは相反する傾向をもったものが内的働きによって生まれてくるとコリングウッドは考えているとみてよいだろう。彼は○外的衝撃のもつ意味、すなわち偶然性あるいは先行するものの特性、衝撃を与えるものが有する特性と衝撃を受けたため新しく生じたものの特性との関係 ○再生 (rival) という現象の由来 ○必然的展開としての歴史的過程の解明、などの関心の一つ一つについて一見バラバラなものとして、あるいは相互に矛盾するような見解しか示していないが、これらを全体的、統一的に把握する原理的なものを彼は果して持っていなかったのだろうか。

## II コリングウッドの歴史理論にみられる「歴史過程」

### (1) 歴史的知識の限界にもとづく幻の「歴史過程」

——型としてみえる「歴史過程」——

コリングウッドは「愚者が語った場合、それは筋道 plot を欠き、意味を失ってしまう」(従ってそれは真の歴史と言えない) —— William Debbins 編 *Essays in the philosophy of History* R. G. Collingwood, 1965. 111-'12, 以下 ESSAYS と略す——として歴史における筋道の重要を指摘している。それでは彼は具体的にどのような筋道が歴史の中にあると考えただろうか。ESSAYS を中心にさぐってみよう。

歴史が筋道をもったものと考えられるようになったのは、歴史学の発展と深い関係があると彼はいう。すなわち歴史研究の進展に従って多くの成果が生まれ、それによってそれまでの空白が埋められ歴史的知識が拡大してゆく。(ESSAYS, 39) そうして歴史的事実・出来事 (A, B, C, D…………) が A から B へ, B から C へ, C から D へ…………と間隙なく時間的経過の中で相接してゆくとき、歴史の全体像が人々の目前で次第にはっきりとその姿をあらわしてくるといい、それが知的人間の行為に関する知的な物語である場合にはじめてそれを歴史と呼ぶことができる (ESSAYS, 112) としながら、コリングウッドは実際には如何に多くの歴史的事実でもって世界史を組立てても、これが充分ということはありません。僅かな部分でも省略したり飛躍があれば、真の意味を誤らしてしまうと厳しく規制する。従って歴史研究者には、この理想を追って、換言すると筋道を獲得するために個々の歴史的事実をあますところなく探し求める努力が課せられているのである。

ところで、歴史が予め準備され、組立てられた首尾一貫した全体であるとわれわれが知る唯一の方法は、歴史を研究し出来事と出来事との結びつきをみることによってである。すなわちある出来事と別の出来事との間の必然的結びつきが歴史にはある。そして歴史のある時代を詳細に研究すればする程、その時代がその前後の時代と相互に密接にからみ合っていて展開している

ことがわかり、こゝではじめてその全体像がはっきりしてくる。(ESSAYS, 37)

しかし、出来事を細大漏らさず知り尽すことができるかどうかということの外に、出来事と出来事との間の必然的結びつきは一体どこから生じてくるか、これもまた大きな問題点であり、これを彼はどのように考えていたのであろうか。

もし結果が存在するものなら、その先行事は必然性を有し、たまたま先行事が納得されれば、その結果は必然性をもっている。(ESSAYS, 37)

これでは全く答えになっていない。歴史は筋道を有するものであるということが、嘗て永い間ヨーロッパにおいて支配的であった「神の摂理」にみられるような決定論的な働きを、人間社会の外において、人間を超えて歴史を考えるのではなく、歴史の筋道とは歴史の過程に前もって存在せず、全くの俄か作りの、人々が即興で演ずるドラマのようなものであるという(ESSAYS, 36)とき、彼は歴史を前後の結びつきを全く欠いた単なるアトム的(個々バラバラの)出来事の不確かな一連のつながりとはみないが、しかもなお予定のコースを予定通りに過してゆくものとも考えず、人々の即興的行為としたことから、いくらか彼の考え方をつかむ手掛りが得られそうである。

歴史哲学は歴史的経過の中で自ら細かく働いている計画を解説することである。(ESSAYS, 36)

と彼が定義するときの、解説の正当性の根拠は彼の立場からすれば、歴史を思考する者とその思考対象である歴史事実との関係そのものにあるのである。従って出来事や事実をこのような関係として捉えると出来事と出来事との間にみられる必然性というものもまた、歴史を知ろうとする者の思考の働きと不可分の関係にあることが分る。

理想の歴史と、どのように努力しても完全無欠なものとはならない事実をもとにして筋道を創らざるを得ない個々の歴史家の行為の成果としての歴史叙述の現状との間には大きなギャップがあつて、それを埋めることは不可能である。これが所謂歴史的知識につきまとう限界である。従って歴史的知識の限界は、実現不能な歴史の完全把握(さきに言う理想の歴史)をめざすことであると同時に、その行為の際に歴史家一人ひとりが落す自分の影であると言えよう。そして歴史を知ることが不可能の領域においてしか実現しないとすれば、この限界(不可能への接近)をどう切り開いてゆくかがコリングウッドにとっては、歴史学の課題であつたとみてよかろう。こゝで彼の実際的作業(歴史叙述)に入る前に、こうした限界から生じる幻想のいくつかを指摘することによってコリングウッド自身の具体的歴史叙述に臨む態度——彼の叙述の論理——を側面から明らかにすることができるものとする。

われわれが歴史を意味のあるものと理解しようとする場合、それをわれわれの知り得た歴史の出来事・事実在即して考える以外にてだてはない。この場合、先にも述べたように歴史家は

過去のすべての出来事・事実を知ることはおよそ不可能なことであるから、それぞれの歴史家の世界（歴史家の有する知識）に制約されるのは当然である。従ってまた歴史の意味は歴史家各人の歴史知識の広狭だけでなく深淺によっても異なる。この限界を自覚しないと、歴史家は歴史全体からみて、単にその僅かな部分にすぎぬものをもって全体を見尽したと誤認してしまう。こうした誤謬の一例としてコリングウッドはO. Spengler の歴史をあげている。そしてこうした誤りの生ずる理由について彼は次のように考えた。すなわち、歴史的知識の限界を認識していないと、歴史家が知り得ないものは現在存在していないものとして全然考慮されず、そこから知覚されるものだけが全てであると錯覚することによって、換言すると歴史研究が不十分な場合、一体どのような事態が生じてくるだろうか。歴史を、始めがあり、中途があり、そして終がある完結体の数多くの集合とみなしてしまうだろう。

歴史の「時期」は勝手に作られた組立場、全体の文脈から引きちぎられたあるみせかけの統一をもち、さらにみせかけの孤立の中にあてがわれた単なる一部分であるが、そのようにされることによって反って、始め、中途、そして終りを獲得する。（ESSAYS, 74）

その結果歴史はバラバラに分割され、その一つ一つを完結したもの（これが時期であり時代である）として捉え、その上で歴史全体をこれらの時代や時期の集合とみるとき、しばしば歴史過程は循環するものと考えられがちである。完結したある時期・時代とそれに隣合った次の別の傾向を有し、かつ完結した時期・時代との間の関係について正しく理解すること、言いかえると、

誤謬は唯一の観念、一つの傾向や特色でもって文化を特徴づけようとするため、また唯一の観念が自説を主張する何かをもつために、反対を呼び、その後それ自身を反復するだけでなく、これとは反対のもので言明・反対言明の遊戯を演じて進んでゆくことを認識せず、この一つの中核的概念でもってすべてを説明しようとするために生じるのである。（ESSAYS, 63）

すなわち彼の言う誤謬の結果が所謂歴史における循環のパターンである。そしてこのパターンをあてはめると、

時代は全くの墮落、単純な墮落、すぐれて墮落の時代であると常に主張される——これこそ歴史の循環理論に共通する性質である。（ESSAYS, 82）

この点、コリングウッドは一時期・一時代が墮落崩壊で終ることが誤りであるとは言っていない。むしろ彼は歴史的にみて事実であるとさえする。

16世紀を手書き書籍が衰退した時代とするのは全く正しいし、それと同じように、17世紀は多音音

業の衰退した時代であり、18世紀は絶対主義王制の衰微した時代、さらに19世紀は帆船の衰えていった時代であることもたしかである。(ESSAYS, 81)

ところで歴史を各時代の精神・思想・文化等の特徴が「生れ、成長し、やがて死滅」を繰返えすものとする立場は、シュペングラーという特定の人の独創的思考ではなく、いつの時代にも考えられたもので、しかもそれは今後も永遠にそうであり、またある面でそれは正しいとコリングウッドが指摘するためにはそれなりの意味があつてのことである。

明らかにスモレットが現代美術の最も墮落したところにペトリ教授は最高の勝利(大きな業績)を見だしている。著者は自分の生きている時代の一般的好みをよく代表し、各人はその好みの忠実かつ適当なスポークスマンである。(ESSAYS, 79)

こうしたことになるのも歴史の知り得た部分をもって判断するからである。ある意味でこれは必然的帰結であつて、そういう意味で事態は「永遠に」そうであり、また「正しい」のである。しかしこれは逆に言うこともできる。

本来すべての時代がそう(暗黒)であるという意味および、あれこれの歴史家が嫌つたり誤解した時代という意味を除いて、暗黒時代などあり得ないし、滅亡もあり得ないことだ。(ESSAYS, 81)

ところで歴史過程を循環というパターンによって理解する立場には、歴史思考に欠くことのできぬ重要な要素が欠落している。すなわち、

シュペングラーの所謂歴史哲学は、従つて繰返えすようだが、方向性に欠けている。なぜかと言うと、それは歴史を基本的観念間に何の関係もない、多数の文化に還元してしまうから。(ESSAYS, 71)

こゝで言うところの歴史の方向とは、目的論的、あるいはその最もはっきりしたものとしての歴史終末論のように、過去だけでなく、現在から先の未来についても、前もって規定する歴史の目標乃至は意義を明らかにするものではなく、歴史的現在(すなわち、単なるいまだけでなく、事件や出来事の生起したその時、その時を含めての現在)なぜかあるのか、どうしてそうなつたのか、どこから現在のよな状況があらわれてきたのか等々歴史を首尾一貫した運動として考える立場である。これが欠けていたため前述したよな誤謬を犯してしまつたと彼は判断する。従つてこうした問に答えることは、すなわち「どのような段階や局面を経て、このよなものに発展したかを発見する」(ESSAYS, 75)ことこそ歴史家の最高の仕事とコリングウッドが考えたのも循環的パターンで真の歴史過程は把えられないとはっきり認識していたからである。この点を意識しておれば、ある時期・時代がその前の時期・時代とは全く別個に独立し、それぞれの時期・時代はその特色を自らの中から生み出し、自らの力で成長させ、

そして自ら死滅してゆくなどとは到底考えられない筈である。換言すると歴史過程の首尾一貫性・連続性に注目すべきである。

ではなぜそうすべきなのか、その理由についてももう少し彼の言葉によって考えてみると、ある時期・時代を唯単に衰亡の時期・時代とみなすことが歴史の真の理解と言えるかということ、むしろこれは「見る人の目の盲点にすぎない。」（ESSAYS, 79）従って、

生きるということは問題——この問題が変わるまで存在し続ける条件——を解くことである。また、死ぬということは別の問題を後継者に残す（伝える）ということである。（ESSAYS, 87）

蒸気船の興隆は、すばらしいものであった帆船の終焉であり、火器の発達は弓の衰亡であり、キリスト教およびペリチアのもっている神秘的美の興隆は異教主義やヘゲソアの有する地上の美の死でもある。（ESSAYS, 81）

ように、ある時期・時代は滅亡の時代であるが、同時にそれは別の面からすれば興隆の時期でもあるのである。

徐々に死滅してゆくことこそ生きていることと同義である。すなわち弓が、あるいは附随旋律が、あるいは末広がりかつらが滅びる兆を有するということは、人々の心が最早それらのものには留らず、別の表現様式に移り、それらの死を嘆き悲しむ不平者は、彼らの見ている目の前で別の新しいものが生れてきているのに気づかない。（ESSAYS, 81）

事物の生成には長い歳月を必要とするに反して、その崩壊は短時日でなされるため、人びとの目は後者に集中し、亡びゆくものに対する愛惜の情も加って、歴史を衰微・崩壊で切断して考える傾向が自然に強くなる。従って歴史家が歴史知識には限界があるという現実を踏まえないと、循環的パターンを通して歴史は展開してゆくものと解してしまう。コリングウッドのシュペングラーやトインビー批判は主としてこの観点から試みられている。

真の歴史過程というものは、ある文化が突然奇蹟の如く現われ、その特質を変えることなく存在し、そしてある時突然にその特質を失い、次いで別の特質をもった時代が現われて………というふうにあるのではなく、ある観念・思想から、その中で育てられながら一方それと対立・拮抗する別の観念・思想が生まれ、両者が相互に干渉し合うところのいわば応酬の過程ともいべきものである。

さらに歴史を反復するパターンでみると、未来に関しても説明可能とみなされるが、歴史では時間が重要な因子であることは論を俟たない。時間に始めも終わりもないように歴史も本来始めもたなければ終わりもない。従って、歴史の世界は過去のすべてを含むと言われるが、その場合の過去とは現在を終点とした完結した単純な過去ではなく、現在に至る過去の無限の出来事の連続であると共に、未知ながら大きく将来に開かれた未来をも含むものである。しかもこれは過去の出来事からの類推によって予知できるということとは全然性質を異にするものである。



未来を予め知ろうとする歴史家は、路を進んでゆこうとしているあとからくる次の人の歩みを見出そうと、泥道をじっと見つめている追跡者に以ている。(ESSAYS, 68)

歴史家が未来の出来事を叙述するなど、これは全く不可能をやろうとしていることになる。ユニークな存在である歴史的出来事の力強い躍動的過程として歴史を捉えること、換言すると過去の理解は現在を理解するために必須であるとともに、現在の立場に立つてはじめて過去の真の理解が可能となるといういわば二重性をはっきりと認識することが必要である。

ところでこのような緊張関係に身を置くということは、別の観点からすると過去の人々がどのような問題に直面したか、またその問題を彼らはどのように解決したか、そしてそれが現在のわれわれにどうか、わってくるかを明らかにすることでもある。ところが、そうした問題が各時期・各時代によってすべて異なるものであるとするか、あるいは各時期・各時代に直面した人々は異っていても問題そのものは同じであるとするか、何れの立場をとるかによって当然歴史の捉え方が違ってくる。前者を択ると時代にはその時代特有の問題があり、それをその時代の人々は独特の方法で解決しようと努める。あらゆる時代についてそれが言えるから、Aという時代と、時間的に前後関係にあるBという時代とではそれぞれの特徴の間には直接何ら関係はない。

ある時には問題は封建貴族たちの遠心的社会に単一の法や唯一人の王の下での中央集権政府をどのように課したらよいかということであったし、また別のある時には問題は強力な中央集権国家にどのようにしたらある種の地方色を生み出させるかということであった。このように異った問題は異った解決を導き、後者の状況に直面する地方政府の組織の方が前者が直面する強力な個人支配の王朝よりも良いとか悪いとか言っても無意味である。(ESSAYS, 85)

このように歴史全体の中で、時代によって解決しなければならぬ問題の質がすべて異っていると考える立場に立つと、歴史はあたかもモザイクの様相を呈したものとなる。これをコリングウッドは歴史の多様性 *plurality of History* と呼んだ。そして彼はこれを歴史の個有の一面として肯定している。

だが歴史を知るということは、過去の人々の直面した問題およびその解決の仕方が実際にどのようなものであったかを明らかにすることに違いはないが、その問題がどの時代もすべて同じであるとは考えられないか。もしこの立場をとるならば、前述したのとは異った考えがでてくる。すなわち、同一の問題を人々が次第によりうまく、より良く解決していった、その軌跡が歴史であると。従ってこの場合、歴史は遠い過去から時間の経過に従って次第に進歩するものとみなされる。こゝでは歴史を一貫する筋道がはっきりとする。そして現実に歴史は進歩するものとする人々が多く存在することをコリングウッドは指摘する。

(古代ギリシア・ローマの人たちは) 人間生活が蓄ってすばらしいものであったが、今ではすつか

り損われてしまったという。歴史は時代が下るにつれて、だんだんと悪くなってゆき、行き先を眺めると、そこには不幸が見えるだけだ。18世紀、19世紀のヨーロッパの思想家たちによって、この問題（世の中は改良されてきたか、それとも反対に次第に悪くなってきたかという問題）が再度問いかえされ、彼らは全体としてきっぱりと反対の意味でこれに答えた。すなわち彼らはいふ、人間生活は素朴な出発点からすばらしい成熟時代へと進歩してきた。そして、これから先も同じ方向へと続いてゆかないなどと考えるのは理由のないことだと。（ESSAYS, 104～105）

さてそれでは歴史過程はどのような方向性をもったものだろうか。換言すると首尾一貫した筋道の内容は真実どのようなものかという問に対する前記の二つの、全く相反する答えの中から決めなければならないが、コリングウッドは次のように考えた。すなわち古典古代は確かに退廢的傾向が強く、それとは逆に18・19世紀という時代は實際進歩的であったが、古代の人々が全歴史を法則に従って下降・墮落の方向に進むと考え、18・19世紀の人々が上昇的進歩的なものとみなしたことはいづれも正しいとは言えない。歴史全体を貫く方向性をこうした一方的に進歩とか退歩とかで簡単に捉えうるかと言えば、原則的にはたしかに筋道をもたぬものは歴史ではないが、コリングウッドは否とせざるを得ない立場を強く主張する。

多様性という歴史特有の性格があることを忘れた時、歴史を単純化して考える弊があらわれる。ところが一貫性は歴史を単純なものに還元してしまうことを意味しない。歴史は過去から次第に悪くなってきたものでもなければ、その逆に一本調子で天国に到達するように進むものでもない。すなわちそれ程歴史は単純ではない。この多様性は歴史知識はどのように努力しても完全に獲得することが不可能であるという限界性のために、理念としては考えられても現実では達成し得ぬため、上向、あるいは、下向におもむく線に沿って歴史は進むという法則（大前提）で理解・説明しようとする、われわれは真の歴史の姿を見誤ってしまう。このことは先に述べた歴史の多様性だけで歴史の全体像を見ようとすれば、多数の時期・時代をそれぞれ孤立させて、それぞれの時期・時代に共通する反復性を過度に重視して歴史の動きを循環するパターンでみてしまうのと同様、歴史を極端に単純化してしまう危険をもっている。黄金時代と呼ばれる輝かしい、よき時代がかって存在し、それが現在は失われてしまって、物事はどんどん悪くなってゆく。そしていつの日かどうしようもない破滅がやってくると考えた古代ギリシア・ローマの人々も実は一方では、一般に否定されている筈の進歩の考え方をいだし、素直にそれを語っていることが分る。また歴史は進歩向上するものであるとの固い信念をもっていた18・19世紀の人々の中にも、文明は人間の犯した最大の誤りであったとし、世の中が次第に墮落してきたと考えている人が大勢いたことも事実だとコリングウッドは指摘して、歴史を考える場合、時代時代によってそれぞれ個有の傾向があることを認めながらも、いつの時代も単純に一方的な観方だけではなく常に幾つもの、しかも相反する考え方が並存していることに注目するのである。

さて、こゝで彼は何を言おうとしているのであろうか。歴史理解に必須の歴史過程を貫く筋道が時代や人によって異なるのは、見る人によって左右されるということが言いたかったのか。

たしかにある時期・ある時代の内容を調べてみると、全く相対立する諸々の要素が共存していたことは明らかで、その中のいづれをもってその時期・その時代の特徴とするかは議論のあるところである。

18世紀の人々が底（衰微の極）とみたところに（現代の）ペトリ教授は波の頂き（最盛の姿）をみ、一方ペトリ教授が底と考えたところをシュペングラー博士は頂きとする。こうした経過は一体どこで終るのだろう。実際には相互に重さなり合う無数の波があるのであって、ある時には底に沈み、やがて他のものによって次ぎ次ぎととって替わられるものなのか。（ESSAYS, 80）

歴史を部分に切り離して、こゝから古典文化がはじまり、そしてこゝでそれが終る。またこゝでマジアン文化がはじまり、こゝでそれが終るといったとて、歴史についてなにも語っていないのだ。これはたゞ歴史の体に突き立てるために選ぶ標識について述べているだけで………古典とは様式ではないのであって、それ自身の内的論理（its own inner logic）によってマジアンへと進んでゆく一過程、一発展なのである。だからマジアンはマジアンであると同時に古典でもあると言うべきである。だからパンテオンはマジアンへ移行する行為の中の古典である。“移行”という概念、生成という概念（シュペングラー自身勢一杯主張しながらきれいさっぱり忘れてしまったけれど）歴史の一番大切な概念なのである。（ESSAYS, 74）

こうした記述でも分るようにコリングウッドは一步突き進んで、対立・矛盾するものとして現実を把握すること、そしてこの対立・矛盾を含めて論理的にどう叙述してゆくに苦心を払ったのであり、その試みが先にも引用したRoman Britain以下の記述とみてよいと思う。

ところで、たびたび繰返すように、歴史事実をすべて完璧に知ることは不可能であるから、歴史の多様性についてはわれわれの観念として考え得ても、あれもこれもというふうに多様のまゝ雑然と放置するのではなく、言いかえると歴史を筋道のあるものとして知る努力を放棄しない限り、何らかの形で過去の人々の生活の過程を理にかなった形で述べなければならないことはたしかである。従ってどうしても歴史は進歩するものなのか否かの間に答えなければならない。

進歩とか退歩とかという筋道を歴史の中に認めるべきかどうかは、次のような問を出すことにもなるだろう。すなわち、歴史家としての仕事は過去の人々の行為をあった通りに受け入れることであり、彼らが如何に生きたか、生きている時になにをやったかを知ることである（ESSAYS, 77）とすれば、その人たちの行為に関して歴史家は一切評価を加えることは許されないのか、あるいは歴史家は道徳的諸原則を忘れ、価値感覚さえすてきべきなのか。コリングウッドはこの点について政治や宗教の宣伝のために用いられることがまゝあるが、上記の意味では評価してはならぬと言う。歴史家の義務としてたゞ真実を発見し、どのようなことがあろうとも真実を恐れず、偏見をもたずにその真実を述べなければならぬ。そうした歴史家の義務として自己の行為を制御するためには、価値判断をもたねばならぬと考えたが、要するに普通人はある価値判断にもとづいて、よりよくなったとかあるいは逆に次第に悪くなったと考えがちであるが、何時の時代に生きたいかと聞かれれば、過去のことを良く知っている人なら、

おそらく今の方がよいと答えない者はいないだろう。(ESSAYS, 84~85) そうした意味で歴史は進歩するものであることを肯定しているようにみられる。が同時に、

過去は過去であって、それをほめたり非難したりすることはできず、事実をただそのまゝ受け入れるだけである。(ESSAYS, 100)

として比較して評価することは許されないとも言っている。これでも分るようにコリングウッドは、ある観点からすると進歩が肯定されるが、全く別の立場からは評価の許されない存在となる。過去の人々がそれぞれその所属する時期・時代に個有の問題を解決してゆく過程を明らかにするのが歴史家の任務であり、その問題が時代によってすべて異なるとすれば、歴史の連続性が見落されがちであり、そのために歴史を循環するものと誤り、一方解決すべき問題が時代を超えて同一で、この同一問題に対する解決の仕方が時代を経るに従って次第に良く解決される、その過程こそが歴史であるとすれば歴史は進歩するものと考えられる。たゞこれでも歴史はよりよくなってゆくのか、それとも悪くなってゆくのか、そのいずれかに決定できないとすると矛盾は残される。そこでこれを解く鍵として歴史が進歩過程をたどるものか、それとも退歩過程であるかは歴史事実にもとづく正しい理解ではなくて、歴史を知ろうとする人の好き嫌いの感情、好みによって選ばれたものとみるべきだとする考え方が出てくる。あるいはこれはそれぞれの人が有する悲観的傾向、楽観的気質のいずれかによって歴史の流れを決めてしまうことである。コリングウッドはこの点について次のようにいう。人の好みからすれば一人の人が、ある事実を好みもし同時に嫌うことだってありうるのであって、その選択は全く斑気にすぎないと。

スモレットがゴシック芸術が嫌だということによって彼を非難するのはあたらない。彼にはゴシックを研究する暇がなかっただけである。すなわち換言すると彼の教化は充分ではなかったのだ。だから時間さえ与えられれば、ゴシックを研究し、その良さを「発見」するだろう。これは他のすべてのことにも同じように言えることだ。(ESSAYS, 87)

従って歴史過程がどのような筋道をとるかということは、人の好みによって決められるものではなく、あくまでも歴史的思考の中で捉えられなければならないと彼はする。たゞ「歴史の中のすべての変化は充分な理由によって生起する」ことを前提にして考えると、こうした好みによって変化が生じたなどと考えること、換言すると歴史過程を人の好みで説明することが誤りであることは明かだが、コリングウッドは好みは好みとして置いておいても「元来、発展変化の中に存在する論理性、合理性をもった歴史認識には別に邪魔にならない」(ESSAYS, 111)と言う。すなわち、好き嫌いからすれば、ある美しいもの、自分にとって好ましいものを失うことは別の美しいもの、あるいは好ましいものを手に入れたことであり、好みを基本にして考えればすべてのものを忌避しないで知ることの方がむしろ大切である。例えばノルマン

建築からゴシックのそれへの移り変りをとってみても、こうした変化を起させたものは建築するためにより安価に、より強くということが建築の主たる目的であり、このはっきりした目的（理由）がある一方、建築で要求される美的価値からこの変化をみると、ノルマン建築の美は失われてゆくが、そのもっている美とは違うゴシック的美を獲得したわけで、この移行の理由は、理性的でもなければ論理的なものでもない。従ってAからBへの移行・変化について所謂人の好みはその原因とはならないと考えるべきであるというのである。

（未完）

（昭和50年 9月29日受理）